

宮崎県内陸部地下式横穴墓被葬者の親族関係

田中, 良之
九州大学大学院比較社会文化研究院

舟橋, 京子
九州大学総合研究博物館

吉村, 和昭
奈良県立橿原考古学研究所 | 九州大学大学院比較社会文化学府博士課程

<https://doi.org/10.15017/26500>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 10, pp.127-143, 2012-03. 九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：



宮崎県内陸部地下式横穴墓被葬者の親族関係

田中良之^{*1}・舟橋京子^{*2}・吉村和昭^{*3}

^{*1}九州大学大学院比較社会文化研究院、^{*2}九州大学総合研究博物館、^{*3}奈良県立橿原考古学研究所・九州大学大学院比較社会文化学府博士課程

Reconstruction of kin- relations of the skeletal remains from under-ground tunnel
tombs located in inner area of Miyazaki

Yoshiyuki TANAKA¹, Kyoko FUNAHASHI², Kazuaki YOSHIMURA^{1 and 3}

1 Graduate School of Social and Cultural Studies of Kyushu University, 744 Motoooka, Nishiku, Fukuoka 812-0395, Japan

2 The Kyushu University Museum ,6-10-1 Hakozaki, Higashiku, Fukuoka 812-8581, Japan

3 Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture, Unebil, Kashihara, Nara 634-6056, Japan

1. はじめに



地下式横穴墓は古墳時代の南九州にみられる独特の墓制である。その分布はおよそ宮崎県の小丸川流域以南、鹿児島県の大隅半島、川内川上流域の大口径盆地以東が知られ、さらに宮崎県えびの盆地(加久藤盆地)から国見山地を北に越えた熊本県人吉盆地でも2基の地下式横穴墓(天道ヶ尾地下式横穴墓)が確認されている(西住編1900)。これら地下式横穴墓の分布については、5地域(1:平野部、広義の宮崎平野部、2:内陸部、西諸県地方、3:内陸部、えびの・大口径盆地、4:内陸部、都城盆地・北諸県地方、5:平野部、大隅半島志布志湾沿岸)に分ける理解が一般的であり(北郷1986など)、本論で扱う旭台地下式横穴墓群、立切地下式横穴墓群はともに西諸県地方に含まれる。

著者のうち田中は、これまで古墳出土人骨を対象として、古墳の考古学的情報と出土人骨の歯冠計測値を中心とした遺伝的形質を用いて親族関係の分析を行ってきた。その結果の概略は、5世紀の後半には支配層から農民層まで父系化が行われたというものであり、それと連動して共同体の解体と家族の自立が進行し、群集墳に反映された傍系親族の分節運動を促して経営単位と生産力の増大をもたらし、古代国家形成のインフラを準備したというものであった(田中1995:2008等)。

しかし、これまで南九州においては分析例がなく、この地域が西日本を中心とする列島の親族関係変化、ひいては社会変化と連動していたかどうか明らかにはなっていなかった。

今回、その機会を得て分析を行うことができたので、以下にその結果と若干の考察を行うことにしたい。

2. 資料と方法

本論で用いた資料は、宮崎県西諸県郡高原町大字広原字旭台所在の旭台地下式横穴墓群および西諸県郡高原町大字後川内字立切所在の立切地下式横穴墓群である。前者は、霧島山系から延びる標高330mの台地上に立地する。台地北側の谷筋を流れるいくつかの小河川は大淀川支流の岩瀬川に流れ込んでいる。一方、南側では同じく大淀川支流の高崎川が都城盆地へと東流している。昭和50(1975)年、牧場改良の掘削整地作業中に発見され、13基の地下式横穴墓が調査された(石川他1977)。人骨は7基から合計31体(松下他1983)が出土している。ただし2号墓で歯が出土しており、これを含めると8基32体である。2号墓以外は複数埋葬である。奥壁のみ残存の10号墓以外、いずれも副葬品を有しているが、おもに刀、剣、鉄鏃、刀子の鉄製品である。9号墓ではこれら以外に貝輪、鉄鉾が含まれていた。これらの副葬品から、この墓群の築造時期は4号墓が5世紀末かそれ以降と見られる他は5世紀前葉～中葉と考えられる。

これら旭台地下式横穴墓群のうち、本論における分析が可能であったのは、3号・7号・9号・11号・12号の地下式横穴墓であった。

立切地下式横穴墓群は、大淀川支流、炭床川左岸の丘状地形の標高190～196mの斜面に立地する。昭和62・63(1987・1988)年、圃場整備にともなう2回の発掘調査により、地下式横穴墓72基、土坑2基、土器集中域2ヶ所が確認されている。地下式横穴墓は未掘部分を合わせると100基を超えるものと推定される(面高・長津他1991)。人骨は24基から合計77体が出土している。そのうち複数埋葬が確認されたのは16基である。

副葬品は刀剣・鉄鏃の武器類、刀子、鉈、直刃鋤先、鉄釧、貝輪、豎櫛、白玉、管玉などである。全く副葬品を持たないものは72基中32基とほぼ半数を占めている。副葬品の年代からみて、この墓群はほぼ5世紀代を通じて造墓がおこなわれたと考えられる。

これら立切地下式横穴墓群のうち、分析を行ったのは3号・4号・6号・30号・35号・60号・63号・64号・68号の地下式横穴墓である。

本論は以下の方法によって行う。まず、旭台・立切地下式横穴墓群の被葬者における埋葬順位を確定し、被葬者の性判定・年齢推定を行い、埋葬された人骨の状態から埋葬間隔を推定することにより、生前の被葬者の世代構成を復元して、地下式横穴墓ごとの親族関係モデルを作成した。埋葬順位の確定と埋葬間隔の推定は、旭台地下式横穴墓群は宮崎県埋蔵文化財センターに所蔵された調査時の実測図・写真の、立切地下式横穴墓群においては宮崎県埋蔵文化財センター・高原町教育委員会所蔵の実測図・写真の精査によった。また、旭台地下式横穴墓群の性判定・年齢推定は、報告書の記載に基づきつつ、宮崎県立西都原考古博物館にて実施した。

その後、出土人骨の分析が可能であった旭台地下式横穴墓群出土人骨について歯冠計測を行ってQモード相関係数により血縁関係の推定を行い、旭台地下式横穴墓群におけるモデルの選択・検証を行った(田中他1985;土肥他1986;田中1995)。そして、その結果から、立切地下式横穴墓群における親族関係モデルの妥当性を検討することにより、当該地域の地下式横穴墓群における親族関係の予察を得ることとした。

なお、年齢区分については、乳児(0-1歳)、幼児(2-6歳)、小児(6-12歳)、若年(12-20歳)、成年(20-40歳)、熟年(40-60歳)、老年(60歳以上)を用いている。また、「成年～熟年」というように記したものがあがるが、これは成年と熟年の境界を前後する年齢であることを意味する。

3. 旭台遺跡被葬者の親族関係モデル

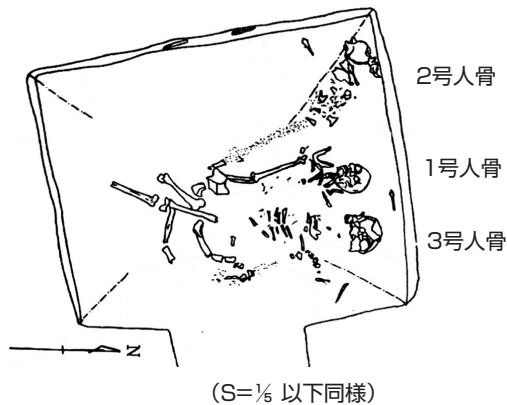


図1 旭台3号地下式横穴墓人骨出土状態

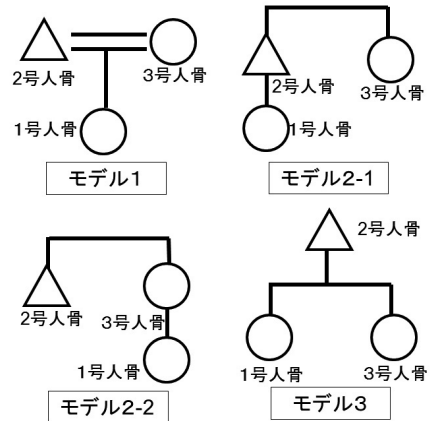


図2 旭台3号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

3-1. 旭台3号地下式横穴墓 (第1図)

3体が埋葬されていた。奥壁側から2号人骨(熟年前半男性)、1号人骨(成年前半女性)、3号人骨(熟年後半女性)である。女性2体はともに前耳状溝が認められ、経産婦であった可能性が高い。玄室内の奥壁側は落盤による土砂の流入により、人骨も乱されていたようである。そのためか、2号人骨の下肢は1号人骨の位置にまで移動していた。ただ、土砂流入の範囲外の1号人骨右上半身の位置に下顎骨が移動しており、2号人骨は1号人骨の追葬時にある程度乱されていたことがうかがえる。

1号人骨は、下肢骨が大きく乱されており、大腿骨上に3号人骨の右大腿骨が乗っている。右の肘関節は正位を保っているが、肋骨が大きく乱されている。また、3号人骨は、おおむね関節状態を保っており、最終埋葬と考えられるが、椎骨が関節した状態で大きく湾曲しており、玄門側から押しやられたような状態を呈する。閉塞側からの土砂の流入によるものか、あるいは再開口した後に儀礼(田中・村上1994: 田中2008a)を行った可能性があるが、これについては判断を保留したい。

以上の人骨出土状態からみて、2号人骨は1号人骨追葬時には靱帯や軟骨などの軟部組織が腐朽していたと考えられ、そのために要する10年かそれ以上の間隔(田中他1985)をあけて追葬が行われたことが知られる。また、1号人骨も同様であることから、3号人骨の追葬にも同程度の間隔を見込む必要があろう。そうすると、3体の生前の年齢は2号人骨(熟年前半)、1号人骨(若年後半)、3号人骨(成年後半)程度となり、2号・3号と1号人骨の間に世代差があったと考えられる。ただ、埋葬間隔が10年以上である場合には、2号人骨と3号人骨にも世代差があったことになり、その場合は2号人骨と1号・3号人骨に世代差があったことになろう。

したがって、考うる被葬者の親族関係モデルは第2図のように、夫婦と娘(モデル1)、キョウダイといずれかの娘(モデル2)、あるいは父と娘二人(モデル3)の三つの場合が考えられる。

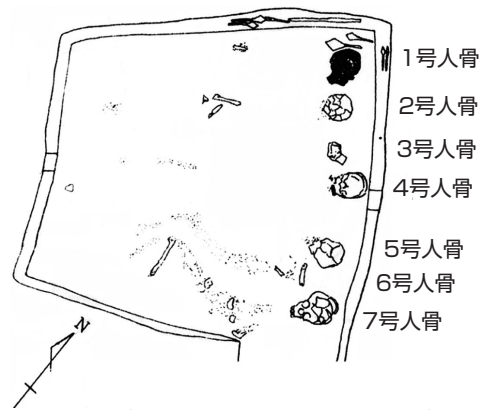


図3 旭台7号地下式横穴墓人骨出土状態

3-2. 旭台7号地下式横穴墓 (第3図)

7体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(熟年男性)、2号人骨(熟年女性)、3号人骨(成年男性)、4号人骨(熟年女性か)、5号人骨(成年前半男性)、6号人骨(性別不明小児~若年)、7号人骨(成年後半女性)である。2号人骨に前耳状溝が認められ、経産婦であった可能性が高く4号人骨・7号人骨もその可能性がある。

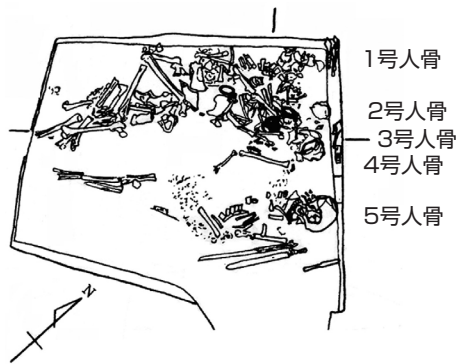


図4 旭台9号地下式横穴墓人骨出土状態

このうち7号人骨は右側臥であり、最終埋葬時に場所が取れずに押し込んだような状態である。しかし、6号人骨の膝関節には乱れがなく、この2体の埋葬間隔が短かったことがわかる。全体的に四肢骨の保存が不良で、埋葬間隔を判断できる所見が得られないが、等間隔に埋葬されていることから、いずれも乱れがなかったと仮定すると1号・2号・4号が第一世代で、3号・5号・6号・7号が第二世代という二世帯構成か、6号が第三世代になるという二つの世代構成が考えられる。したがって、第一世代と考えられる男女(1号・2号・4号)と第二世代の男女(3号・5号・7号)が夫婦であるのかキョウダイであるのかが問題となろうが、埋葬間隔の推定が6号・7号間でしかできなかったことから、親族関係のモデル化は困難である。

ただ、年齢から見ると、第一世代の3体は生前の年齢が近かった可能性があり、第二世代でも3号・5号人骨と7号人骨は近い年齢の男女である可能性があるが、6号人骨は12歳前後であり、年齢的に離れている。

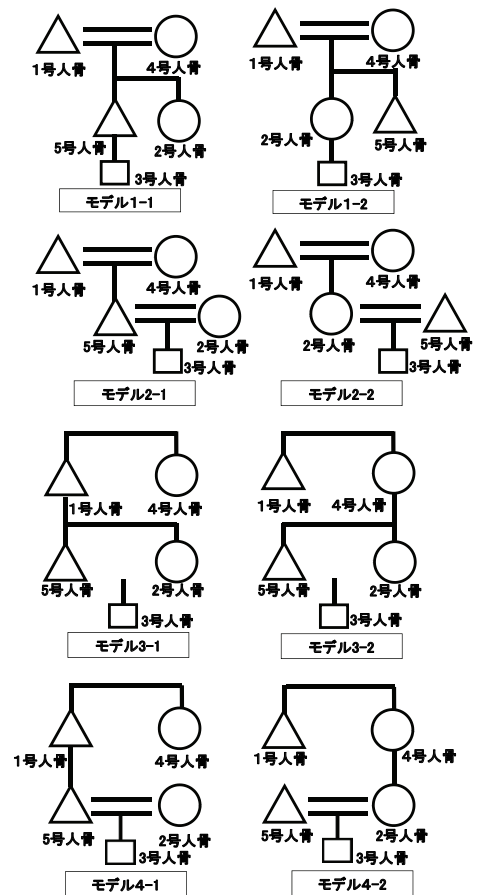


図5 旭台9号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

3-3. 旭台9号地下式横穴墓(第4図)

5体が埋葬されていた。奥壁側から1号人骨(熟年後半男性)、2号人骨(成年前半女性)、3号人骨(小児7歳前後)、4号人骨(熟年~老年女性)、5号人骨(成年~熟年男性)である。最も玄門よりの5号人骨が最終埋葬であり、おむね全身の骨が関節状態を保つ。1号人骨は、奥壁近くに片付けられ四肢骨も骨盤もバラバラの状態であるが、脊椎骨は関節した状態である。2号人骨は、全身の関節が完全に外れた状態である。大腿骨が1号人骨の寛骨下にあることからみて、3号人骨もしくは4号人骨の追葬時に1号人骨の四肢骨とともに片付けられたと考えられる。ただ、1号人骨の奥壁に接した部分や脊椎骨については3号・4号の追葬とは関係のない場所にあるため、やはり2号人骨追葬時に片付けられたと考えられる。なお、2号人骨には前耳状溝が認められたが、女性人骨のうち観察可能だったのはこの1体のみであった。

3号人骨は、4号人骨とともに四肢骨が5号人骨の足下奥壁よりに片付けられている。3号人骨と4号人骨の間隔は不明であるが、5号人骨との埋葬間隔は大きいことが知られる。

以上から、9号墓における1号・2号間には10年前後、2号と3号・4号間、それに5号との間には10年かそれ以上の間隔が見込まれる。したがって、生前の年齢構成は、1号人骨(熟年後半)、2号人骨(10代後半)、3号人骨(誕生前)、4号人骨(成年~熟年)、5号人骨(10歳前後)となり、1号・4号が第一世代、2号・5号が第二世代、3号が第三世代ということになる。そうすると、親族関係モデルは第5図のようになり、第一世代、第二世代の男女が夫婦かキョウダイかという点が問題となろう。

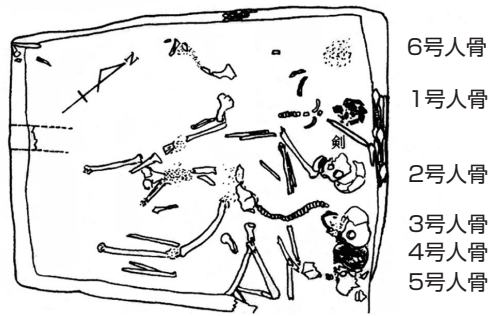


図6 旭台11号地下式横穴墓人骨出土状態

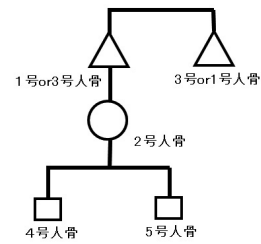


図7 旭台11号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

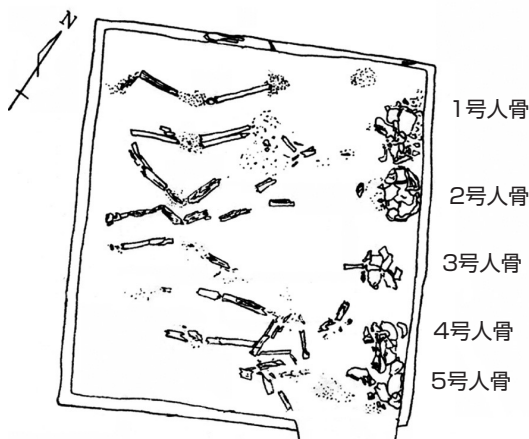


図8 旭台12号地下式横穴墓人骨出土状態

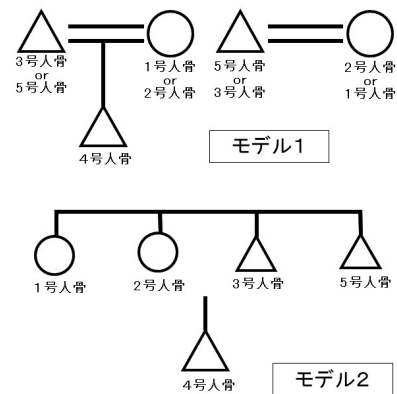


図9 旭台12号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

3-4.旭台11号地下式横穴墓(第6図)

6体が埋葬されていたようであるが、玄室最奥部の6号人骨は骨粉となっている。奥壁側から6号人骨(性別年齢不明)、1号人骨(成年半ば男性)、2号人骨(成年女性)、3号人骨(熟年後半男性)、4号人骨(小児8歳前後)、5号人骨(若年12歳前後)である。6号人骨は、奥壁から一定の空間を空けて1号人骨が追葬されていることから、追葬時の片付けはなかったと考えられる。

1号人骨は、椎骨は関節しており、左上腕骨は大きく外れているが、前腕との関節は保っているようである。左膝も関節状態であるが、軸が玄門側にずれていて、骨盤の関節は完全に外れている。したがって、1号人骨と追葬の間には10年程度の間隔は見込まなければならないだろう。

2号人骨は、1号人骨に接して玄門側に埋葬された女性で、四肢骨の骨端が未癒合であるが、第3大臼歯が萌出して咬耗も始まっていることからみて、成年に達していると考えられる。また、左右寛骨に弱いものの前耳状溝が認められる。右大腿骨は反転して後面が上になっており、膝関節も外れている。上腕骨も動かされており、2号人骨の追葬との間に一定の間隔があったことを示している。

3号人骨は、頭骨から骨盤まで関節しているが、大きく湾曲しており、押しやられた状態を示す。下肢骨も、右は大きく動かされながらも下腿まで関節しており、左の下腿のみが片付けられている。このことから、その後埋葬された4号人骨、5号人骨との間にそれほど間隔がなかったことを示している。なお、4号・5号人骨は、玄門近くに葬られており、5号が最終埋葬と考えられるが、保存状態は良くない。

以上から、11号地下式横穴墓における生前の年齢構成は、情報のない6号人骨を除くと、1号(成年半ば)、2号(10代前半)、3号(成年半ば)、4号・5号(誕生前)といったものになり、1号・3号が第一世代、2号が第二世代、4号・5号が第三世代となる。そして、6号人骨については、第一世代が第二世代のいずれかに属することになるだろう。したがって、

表 1. 旭台 3 号地下式横穴墓被葬者の歯冠計測値による Q 相関係数

歯種の組み合わせ	3-2*3-3
UCP1P2M1M2LCP1P2M1M2	0.345
UP1P2M1M2LP1P2M1M2	0.433
UCP1P2M1LCP1P2M1	0.287
UP1P2M1LP1P2M1	0.431
UP1M1LP1M1	-0.030
UCP1P2M1	-0.084
UP1P2M1	0.161

表 2. 旭台 7 号地下式横穴墓被葬者の歯冠計測値による Q 相関係数

歯種の組み合わせ	7-5*7-7
UCP1P2M1M2LCP1P2M1M2	—
UP1P2M1M2LP1P2M1M2	—
UCP1P2M1LCP1P2M1	—
UP1P2M1LP1P2M1	0.734
UP1M1LP1M1	0.744
UCP1P2M1	0.878
UP1P2M1	0.779

葬までの間に一定の間隔があったことを示している。

4号人骨(成年前半男性)は、遺存した骨は少ないものの、上下肢ともに動かされており、5号人骨の追葬までに相当の間隔が見込まれる。

5号人骨(熟年後半男性)は、ほぼ原位置を保つと考えられるが、他の被葬者と異なり下半身を奥壁側にずらして葬られ、全体として4号人骨の上に乗った状態である。

以上から、12号地下式横穴墓の被葬者の生前の年齢は、1号(成年半ば)、2号(成年後半)、3号(成年前半)、4号(小児~若年)、5号(成年前半~半ば)程度であると考えられ、1号・2号・3号・5号が第一世代、4号のみが第二世代という二世構成と考えられる。したがって、親族関係モデルは第9図のようになり、第一世代の男女が夫婦かキョウダイであるかが問題となるだろう。

親族関係モデルは6号人骨の性別と年齢によって変化することになるが、第7図では復元可能な5体をもとに表現してある。

3-5. 旭台12号地下式横穴墓(第8図)

5体が埋葬されていた。奥壁側から1号人骨(成年半ば女性)、2号人骨(成年~熟年女性)、3号人骨(成年半ば男性)、4号人骨(成年前半男性)、5号人骨(熟年後半男性)の5体が出土しており、奥壁側から順に埋葬されたと考えられる。

1号人骨は、頭骨と下肢が遺存しているが、左下肢が2号人骨右下肢と接しているにもかかわらず全く乱れないことから、追葬までの間隔の短さを示している。2号人骨は、1号人骨と同様、全く乱れない。3号人骨は、下肢骨は正位にあるが、上腕骨が頭骨近くくに動かされており、4号人骨の追

4. 旭台遺跡被葬者の親族関係

旭台地下式横穴墓群被葬者の歯冠計測値に基づくQモード相関係数の計算結果は表1-5の通りである。まず、3号地下式横穴墓については、計算可能であったのが2号人骨と3号人骨であるが、上下顎の犬歯-第2大臼歯、第1小臼歯-第2大臼歯、犬歯-第1大臼歯、第1小臼歯-第1大臼歯の組み合わせで0.3~0.4台の値が得られているものの、この方法では便宜的に0.500以上の値が複数の組み合わせで得られた場合に血縁者と推定するため、第一世代男女あるいは第一世代男性と第二世代女性が血縁関係にあると積極的にはいえない結果であった(表1)。ただ、これらの値はその可能性を否定するものではないことは言うまでもない。したがって、3号地下式横穴墓においてはモデルの検証・選択には至らなかった。

7号地下式横穴墓は、二世構成のうち第二世代の男女と考えられる5号人骨と7号人骨の間に4つの組み合わ

表3. 旭台9号地下式横穴墓被葬者の歯冠計測値によるQ相関係数

歯種の組み合わせ	9-1*9-2	9-1*9-5	9-2*9-5
UCP1P2M1M2LCP1P2M1M2	—	—	0.414
UP1P2M1M2LP1P2M1M2	—	—	0.322
UCP1P2M1LCP1P2M1	—	—	0.575
UP1P2M1LP1P2M1	0.434	0.531	0.519
UP1M1LP1M1	0.635	0.598	0.620
UCP1P2M1	—	—	0.692
UP1P2M1	0.523	0.295	0.593

表4. 旭台11号地下式横穴墓被葬者の歯冠計測値によるQ相関係数

歯種の組み合わせ	11-1*11-2	11-1*11-5	11-2*11-5
UCP1P2M1M2LCP1P2M1M2	0.551	—	—
UP1P2M1M2LP1P2M1M2	0.534	0.178	0.352
UCP1P2M1LCP1P2M1	0.340	—	—
UP1P2M1LP1P2M1	0.278	0.496	0.523
UP1M1LP1M1	0.534	0.475	0.649
UCP1P2M1	0.378	—	—
UP1P2M1	0.381	0.895	0.509

せで0.500以上の値が得られている(表2)。したがって、少なくとも第二世代の男女は夫婦ではなく、キョウダイである可能性が高いといえる。ただ、この2人がペアでなく、3号人骨と7号人骨がペアであった可能性はあるが、そうすると5号人骨(男性)とペアになる女性が不在となるため、やはり夫婦という可能性は低いだろう。したがって、夫婦が埋葬の単位ではなく、キョウダイ関係を基本とした可能性が高い。

9号地下式横穴墓においては、二世代の男女と子供という三世代構成であるが、第一世代の1号人骨、第二世代の2号・5号人骨の3体が分析可能であった。表3に示したように、1号人骨と2号人骨の間で上下顎第1小白歯・第1大臼歯、上顎第1小白歯-第1大臼歯の組み合わせで0.500以上の値が得られている。また、1号人骨と5号人骨の間でも上下顎の第1小白歯-第1大臼歯および第1小白歯・第1大臼歯の組み合わせで0.500以上の値が、2号人骨と5号人骨間では上下顎の第1小白歯-第1大臼歯および第1小白歯・第1大臼歯で0.500以上の値が得られている。

この結果により、第一世代の男性と第二世代の男性、女性、および第二世代の男女間で血縁関係が推定され、第一世代と第二世代男女との間の血縁関係とともに、第二世代の男女にも血縁関係が推定され、この二人が夫婦ではなくキョウダイであるという結果となり、モデル1と3が選択されることになろう。

11号地下式横穴墓においては、三世代構成のモデル一つが得られたのみであったが、うち第一世代男性の1号人骨、第二世代女性の2号人骨、第三世代若年の5号人骨が分析可能であった。このうち、1号人骨・2号人骨間では上下顎の犬歯-第2大臼歯、第1小白歯-第2大臼歯、および第1小白歯・第1大臼歯の組み合わせで0.500以上の値が得られている。1号人骨と5号人骨の間には上顎の第1小白歯-第1大臼歯の間で0.895という高い値が、そして、2号人骨と5号人骨間においては上下顎の第1小白歯-第2大臼歯、第1小白歯・第1大臼歯、および上顎の第1小白歯-第1大臼歯の組み合わせで0.500以上の値が得られている(表4)。

この結果は、第一世代の男性、第二世代の女性、第三世代の若年、すなわちモデルでいえば父あるいはオジと娘・孫とがそれぞれ血縁関係にあったことを示しており、モデルと矛盾しないことを示している。そして、第一世代は男性2体、第二世代は女性1体という構成であるため、夫婦を単位として埋葬されていないことも明らかである。

表 5. 旭台 12 号地下式横穴墓被葬者の歯冠計測値による Q 相関係数

歯種の組み合わせ	12-1*12-2	12-1*12-4	12-1*12-5	12-2*12-4	12-2*12-5	12-4*12-5
ULCP1P2M1M2	—	—	—	0.632	—	—
ULP1P2M1M2	—	—	—	0.614	—	—
ULCP1P2M1	—	—	—	0.581	—	—
ULP1P2M1	—	—	—	0.572	0.598	0.373
ULP1M1	0.726	0.574	0.857	0.901	0.624	0.619
UCP1P2M1	0.588	0.734	—	0.387	—	—
UP1P2M1	0.821	0.723	0.882	0.426	0.731	0.645

12号地下式横穴墓は第一世代に男女二人ずつ、第二世代に男性という二世構成であり、3号人骨以外は分析可能であった(表5)。このうち、1号人骨・2号人骨間では上下顎の第1小白歯・第1大白歯、上顎の犬歯-第1大白歯、第1小白歯-第1大白歯の組み合わせで0.500以上の値が得られている。1号人骨・4号人骨間では同じ三つの組み合わせで同様に高い値が得られ、1号人骨・5号人骨間でも上下顎第1小白歯・第1大白歯、上顎第1小白歯-第1大白歯の組み合わせで0.850をこえる高い値が得られている。

2号人骨と4号人骨の間においては、表5における上下顎犬歯-第2大白歯の組み合わせから上下顎第1小白歯・第1大白歯まで五つの組み合わせで高い値が得られた。2号人骨と5号人骨の間でも、上下顎第1小白歯-第1大白歯、上下顎第1小白歯・第1大白歯、上顎第1小白歯-第1大白歯の組み合わせで0.500以上の値が得られている。そして、4号人骨と5号人骨間でも、上下顎第1小白歯・第1大白歯、上顎第1小白歯-第1大白歯の組み合わせで0.600をこえる高い値が得られた。

この結果は、第一世代の女性同士、第一世代の男性と女性二人の間、および第一世代の男女3人と第二世代の男性との間に血縁関係が推定されたというものである。したがって、第一世代の男女が夫婦であるというモデル1は成立しがたい。ただ、分析不能であった男性の3号人骨が1号・2号の女性のいずれかと夫婦であった可能性を考慮するべきかもしれない。しかし、仮にそうであったとしても、血縁の女性2体=姉妹は同じ墓に葬られており、この二人と5号人骨の男性もまたキョウダイであると考えられることから、夫婦を単位とするとは考えられない。そして、第一世代の男女は女性2体の方が年齢的には上であったと考えられることもあわせると、やはりキョウダイのモデル(モデル2)が選択されることになるだろう。したがって、第二世代の男性は第一世代の誰かの子であると考えられる。

以上のように、旭台地下式横穴墓群の分析結果は、血縁関係に基づく被葬者構成であり、同世代の人物はキョウダイ関係にあるといえる。そして、初葬者には女性もみられること、三世構成における第二世代が女性のみ例もあることから、父系でも母系でもなく双系の親族関係であったと推定されるのである。したがって、旭台地下式横穴墓群における親族関係は、田中の基本モデルIの範疇に収まるものであり(田中1995)、キョウダイ関係を基本として複数世代の埋葬を行ったと理解されるのである。

5. 高原立切遺跡被葬者の親族関係モデル

以上の旭台地下式横穴墓群の分析結果をふまえて、同地域に所在し、若干時期が後出する立切地下式横穴墓群の分析を行いたいが、出土人骨が現状では分析不能であるため、被葬者の被葬者の性別・年齢、埋葬間隔の推定に基づく親族関係モデルを得るにとどめ、旭台地下式横穴墓群の結果を援用する形で考察することにした。

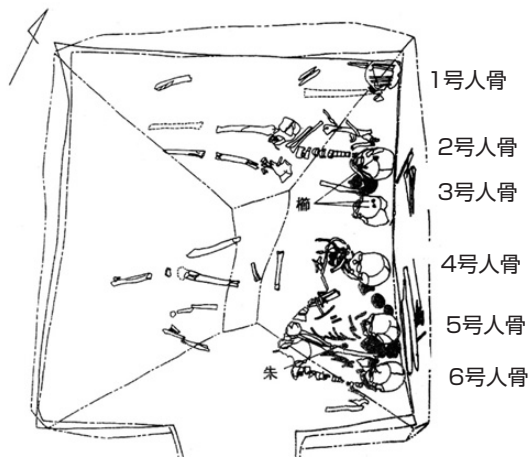


図10 立切3号地下式横穴墓人骨出土状態

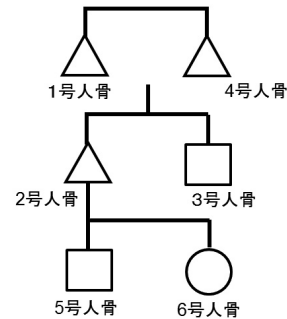


図11 立切3号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

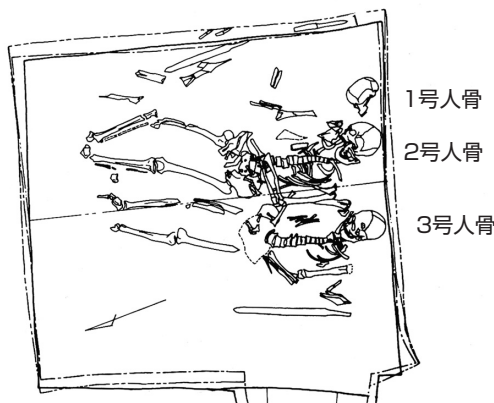


図12 立切4号地下式横穴墓人骨出土状態

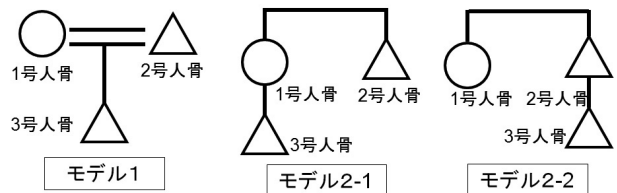


図13 立切4号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

5-1.立切3号地下式横穴墓(第10図)

本地下式横穴墓には6体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(熟年男性)、2号人骨(成年男性)、3号人骨(7歳前後の小児)、4号人骨(熟年男性)、5号人骨(14歳前後の若年)、6号人骨(成年女性)である。いずれも頭位を北東にした伸展葬である。

1号人骨は2号人骨が追葬された際に奥壁側に寄せられている。そして、1号人骨は、痕跡として残存していた頸椎から腰椎までの椎骨から頭蓋が外れていることから、2号人骨の追葬までの間隔が長かったことがうかがえる。2号人骨は、仰臥伸展の状態で全身がほぼ解剖学的正位置を保っており、明瞭な片付けの痕跡は認められない。3号人骨は頭蓋のみが遺存している。4号人骨は、頭蓋および下肢骨はほぼ解剖学的正位置を保っているものの、躯幹骨(肋骨・椎骨)が大きく乱されている。3号人骨に関しては埋葬間隔を直接判断できる所見は得られないが、4号人骨との間の空間が最も狭い上半身間で30cmであることから、大きくは乱されていなかったと判断できる。以上のことから、2号・3号・4号人骨の埋葬間隔は短く、4号人骨と5号人骨の埋葬間隔が長かったと推定される。5号人骨は、上半身には大きな乱れは見られないものの、本来下肢が位置していたと考えられる場所に6号人骨の下肢が位置しており、4号人骨の腰部付近からは未成人の下肢骨が長軸を南北にそろえた状態で出土している。この下肢骨は3号人骨のものとして取り上げられているが、人骨の報告においては3号人骨の下肢は遺存しておらず、5号人骨の下肢として報告されていることから、5号の下肢骨であると判断する。以上の出土状況から、1号と2号間の埋葬間隔は10年前後、2号・3号・4号人骨間の各埋葬間隔は短く、4号・5号・6号人骨の埋葬間隔は比較的長いと推定される。

以上から、生前の年齢構成は1号人骨(熟年)・2号人骨(若年~成年前半)・3号人骨(誕生時)・4号(成年後半~熟

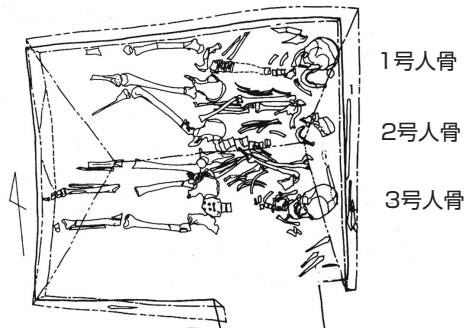


図14 立切6号地下式横穴墓人骨出土状態

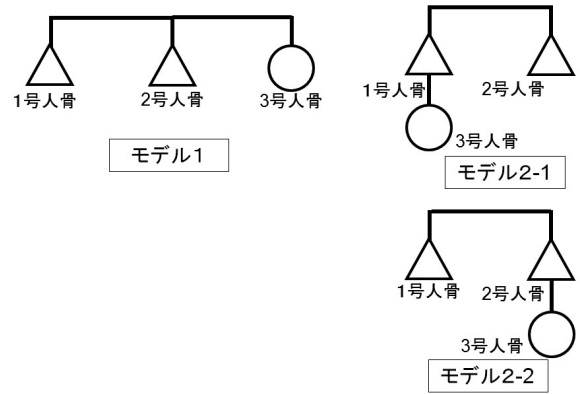


図15 立切6号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

年前半)・5号人骨(誕生前)・6号人骨(誕生)となり1号・4号人骨が第一世代、2号・3号人骨が第二世代、5号・6号人骨が第三世代となる。したがって、被葬者の親族関係モデルは第11図のようになりキョウダイといずれかの子どもとさらにその子ども達の可能性が考えられる。

5-2.立切4号地下式横穴墓(第12図)

3体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(熟年女性)、2号人骨(熟年男性)、3号人骨(成年男性)である。

このうち、1号の四肢骨は、保存状態が良くないものの、それ程大きく動いてはいないことが確認できる。ただし、1号人骨の胸骨柄・胸骨体と考えられる部位が2号の右寛骨上から出土していて、追葬の際に若干は乱されている。2号人骨と3号人骨は、ともに仰臥伸展の状態であり、全身の関節に乱れはない。3号人骨の右上肢に2号人骨の左上肢が乗った状態であり、2号人骨が後から埋葬されたことを示しているが、3号人骨の肘関節には乱れはなく、埋葬間隔の短さを示している。

以上の出土状況から、1号、3号、2号の順に埋葬が行われており、1号人骨は、最終埋葬である2号人骨の埋葬に際し、全身がかなり骨化した段階で片付けられており、それに対して3号人骨には乱れがなかったことから、2号人骨の埋葬までの間隔は短いと推定される。

以上から、生前の年齢構成は1号人骨(熟年)・3号人骨(若年~成年前半)・2号(成年後半~熟年前半)となり、1号・2号が第一世代、3号が第二世代となる。したがって、被葬者の親族関係モデルは第13図のように、夫婦と息子(モデル1)、もしくはキョウダイと息子(モデル2)の二つの場合が考えられる。

5-3.立切6号地下式横穴墓(第14図)

3体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(熟年男性)、2号人骨(熟年男性)、3号人骨(成年女性)である。3体ともに仰臥伸展の状態である。2号人骨は年齢不明と報告されているが出土状況の写真から、骨端線などは確認できず椎骨のリッピング(骨棘)・歯牙のAMTL(生前歯牙喪失)から熟年と判断できる。

1号・2号・3号人骨はそれぞれ上肢が重なっており、1号・2号・3号の順で埋葬されていることがわかる。1号・3号人骨はともに全身の関節に乱れはない。2号人骨の椎骨は胸椎と腰椎間で若干ずれており、左寛骨の正面が奥壁側を向っていて、左股関節が外れている。したがって、2号人骨は、それ程骨化が進んでいない段階で3号の埋葬に際し奥壁側に下半身が若干寄せられており、左股関節は軟部組織の腐朽にともない外れて大腿骨が3号人骨右手骨上に転落したと推定される。したがって、1号・2号人骨の埋葬間隔は短く、2号・3号人骨の埋葬間隔もそれ程長くないと推定される。

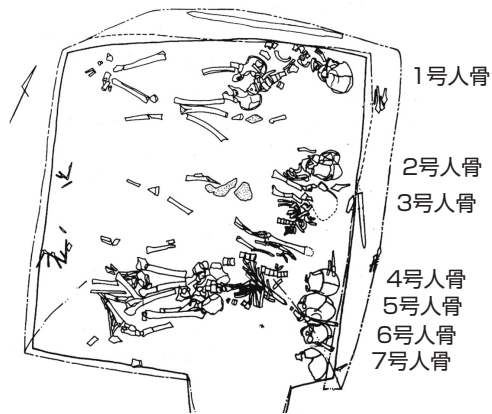


図16 立切30号地下式横穴墓人骨出土状態

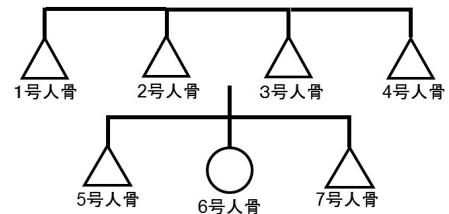


図17 立切30号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

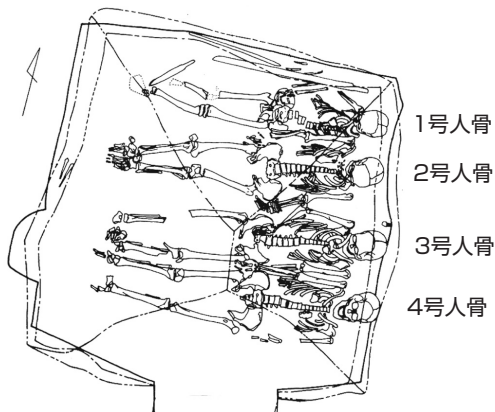


図18 立切35号地下式横穴墓人骨出土状態

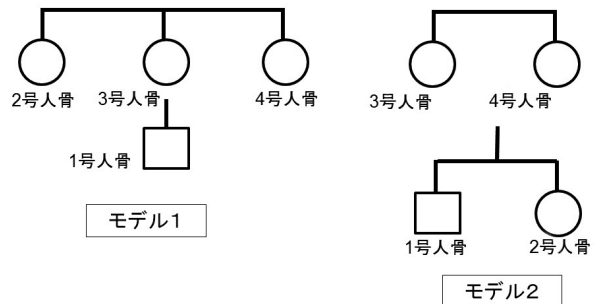


図19 立切35号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

以上から、生前の年齢構成は1号人骨(熟年)、2号人骨(熟年)、3号人骨(成年)となり、3体が同世代、あるいは1号・2号が第一世代で3号が第二世代となる。したがって、被葬者の親族関係モデルは第15図のようにキョウダイ(モデル1)、あるいはキョウダイといずれかの娘(モデル2)の二つの場合が考えられる。

5-4.立切30号地下式横穴墓(第16図)

7体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(熟年男性)、2号人骨(熟年男性)、3号人骨(熟年男性)、4号人骨(熟年男性)、5号人骨(成年男性)、6号人骨(熟年女性)、7号人骨(熟年男性)である。

1号人骨は、腰椎以下は関節状態を保っているものの、頸椎～胸椎と肋骨が大きく乱れていて、2号人骨の追葬が1号の軟部組織腐朽後であったことが知られる。2号・3号・4号人骨の3体は、2号人骨の左下肢がやや奥壁側に寄せられ、4号の椎骨が一部奥壁側にずれている程度で、3体とも全体的に解剖学的正位置を保っている。したがって、2号と3号、3号と4号、4号と5号の埋葬間隔は短いと推定される。5号人骨は、肋骨が大きく乱されており、6号人骨の追葬までに10年前後かそれ以上経過したことがうかがえる。6号人骨の下肢は7号人骨の埋葬に際し5号人骨の下肢上に片付けられているが、ほぼ関節状態を保っている。したがって、6号人骨の靱帯の腐朽がそれ程進んでいない段階で7号が追葬されたことになり、6号・7号人骨間の埋葬間隔は短いと推定される。

以上から、生前の年齢構成は1号人骨(熟年)、2号人骨(成年後半～熟年前半)、3号人骨(成年後半～熟年前半)、4号人骨(成年後半～熟年前半)、5号人骨(若年～成年前半)、6号人骨(成年)、7号人骨(成年)となり、1号・2号・3号・4号が第一世代、5号・6号・7号が第二世代となる。したがって、親族関係モデルは第17図のようになる。

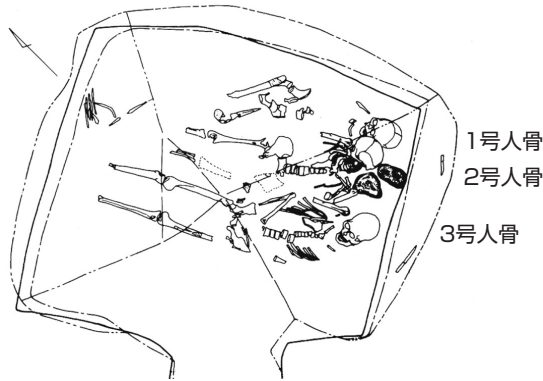


図20 立切40号地下式横穴墓人骨出土状態

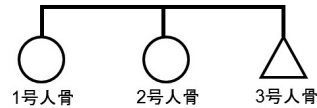


図21 立切40号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

5-5.35号地下式横穴墓(第18図)

4体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(13前後の若年不明)、2号人骨(成年女性)、3号人骨(熟年女性)、4号人骨(熟年女性)であり、4体ともに仰臥伸展葬である。

1号人骨は、全身がほぼ関節状態を保っているものの、腰椎以下がやや奥壁側にずれており、下肢の間隔も狭い。したがって、1号人骨は、ある程度骨化が進んだ段階で下肢を奥壁側に寄せられ、1号の仙腸関節が外れた状態で2号人骨が追葬されたと推定されるため、2体の埋葬間隔は10年以上が見込まれる。2号人骨は、左上腕および左膝関節部が若干奥壁側に寄せられている。3号人骨は、左上腕の外側が上を向き右寛骨の正面がやや玄門よりを向いており、4号人骨の追葬に際し奥壁側に寄せられたと推定される。ただし、2号・3号・4号人骨は、いずれも全身が関節状態を保っていることから、それぞれの埋葬間隔は短いと推定される。なお、2号人骨の右膝蓋骨および3号人骨の左足根骨に人為的移動の痕跡が認められる。

以上から生前の年齢構成は1号人骨(13前後)、2号人骨(若年～成年前半)、3号人骨(成年前半～熟年前半)、4号人骨(成年前半～熟年前半)となり、2号・3号・4号あるいは3号・4号が第一世代で1号あるいは1号と2号が第二世代となる。したがって、考える被葬者の親族関係モデルは第19図のように、3人姉妹といずれかのこども(モデル1)か、姉妹といずれかのこども二人(モデル2)の場合が考えられる。

5-6.立切40号地下式横穴墓(第20図)

3体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(成年女性)、2号人骨(熟年女性)、3号人骨(熟年男性)であり、いずれも仰臥伸展の状態である。

1号人骨は、下肢骨が奥壁側に寄せられており、椎骨の軸も若干ずれているものの、左右の寛骨の間隔はある程度保たれており、右寛骨と右大腿骨もほぼ本来の位置関係を保っている。これらから、1号人骨の仙腸関節・股関節の靱帯がそれ程腐朽していない段階で奥壁側に寄せられ、2号人骨が追葬されたと考えられ、1号と2号の埋葬間隔は10年前後が見込まれる。2号人骨の頭蓋骨は1号人骨側にずれているが、これは軟部組織腐朽後に土塊から転落したものと考えられる。2号・3号人骨の上半身は、いずれも上半身が奥壁側に若干寄せられたように椎骨が湾曲しているが、全身がほぼ関節状態を保っていることから、埋葬間隔は短いと推定される。

以上から、生前の年齢構成は1号人骨(成年)、2号人骨(成年後半～熟年前半)、3号人骨(成年後半～熟年前半)となり、3体が同世代となる。したがって、考え得る被葬者の親族関係モデルは、第21図のように、キョウダイの場合が考えられる。

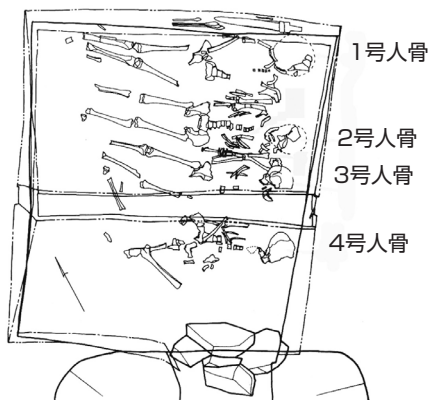


図22 立切60号地下式横穴墓人骨出土状態

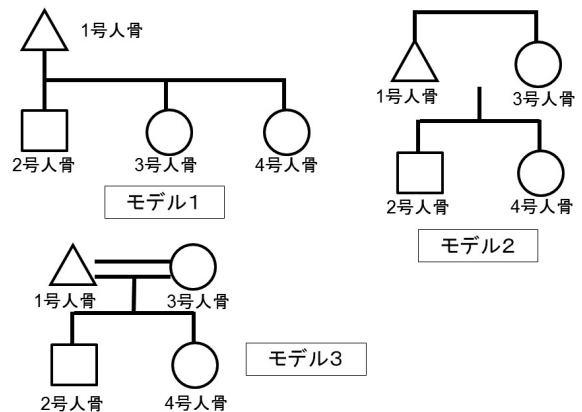


図23 立切60号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

5-7.立切60号地下式横穴墓(第22図)

4体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(成年男性)、2号人骨(15歳前後の若年不明)、3号人骨(成年女性)、4号人骨(成年女性)である。

1号人骨は、全身がやや奥壁側に寄せられており、ほぼ全身が関節状態を保っているものの、胸椎と腰椎間で軸がずれていることから、2号人骨の追葬までに1号人骨軟部組織の腐朽が進行していたことがうかがえる。2号人骨は、ほぼ全身が関節状態を保っていることから、2号・3号人骨間の埋葬間隔は短いと推定される。3号人骨は、枕がないにもかかわらず、頭蓋骨が下顎上から右上腕骨遠位側に移動しており、左膝関節も外れている。この所見から、3号人骨の軟部組織の腐朽が進んだ段階で4号人骨追葬の際に片付けられたと考えられる。したがって、3号人骨と4号人骨の埋葬間隔は比較的長く、10年かそれ以上が見込まれる。なお、4号人骨も上肢・下肢が乱れており最終埋葬後に再開口して儀礼的に動かした可能性も考えられるが(田中2008b)、これまでの事例において5世紀代に類例が見られないことから可能性の指摘にとどめておく。

以上から、60号墓における生前の年齢構成は1号人骨(成年)、2号人骨(幼児)、3号人骨(若年～成年前半)、4号人骨(未成年)となり、1号が第一世代、2・3・4号が第二世代もしくは1・3号が第一世代、2・4号が第二世代ということになる。したがって、親族関係モデルは第23図のようになり、父と子ども達(モデル1)もしくはキョウダイといずれかの子ども(モデル2)あるいは夫婦とその子ども(モデル3)の三つの場合が考えられる。

5-8.立切63号地下式横穴墓(第24図)

5体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(成年女性)、2号人骨(5歳幼児不明)、3号人骨(成年男性)、4号人骨(熟年男性)、5号人骨(成年女性)であり、5号のみ体軸を異にして埋葬されている。

1号人骨は、左橈骨の近遠方向が逆転し、左膝関節も外れていることから、2号人骨の追葬の段階ではかなり骨化が進行しており、奥壁側に片付けられたと推定される。したがって、1号と2号の埋葬間隔は10年かそれ以上が見込まれる。2号人骨は、保存状態が良くないため、3号人骨との埋葬間隔は不明である。3号・4号人骨は、ともに追葬の際に下肢を奥壁側に寄せられているが、いずれも全身がほぼ関節状態を保っている。軟部組織がさほど普及していない段階で動かされていることから、3号人骨と4号人骨および4号人骨と5号人骨の埋葬間隔は短いと推定される。

以上から、生前の年齢構成は2号・3号人骨間の埋葬間隔を短く見積もった場合、1号人骨(成年)、2号人骨(誕生前)、3号人骨(若年～成年前半)、4号人骨(成年後半～熟年前半)、5号人骨(若年～成年前半)となり、1号・3号・4号・5号ないし1号・4号が第一世代で、2号ないし2・3・5号が第二世代ということになる。したがって、親族関係モデルは第25図のようになりキョウダイといずれかの子どもの場合(第25図モデル1・2)と夫婦とその子ども(第25図モデル3)

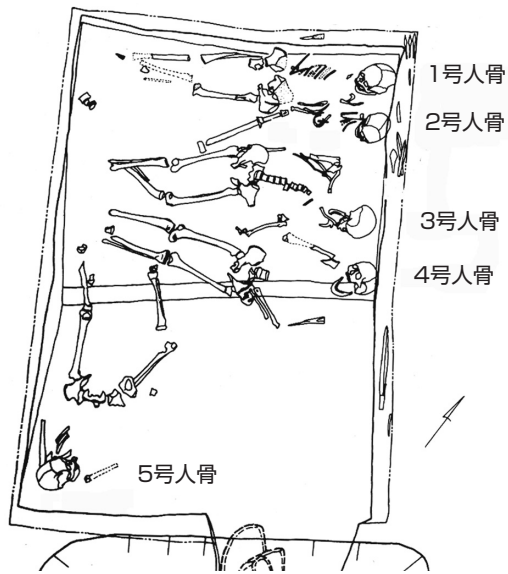


図24 立切63号地下式横穴墓人骨出土状態

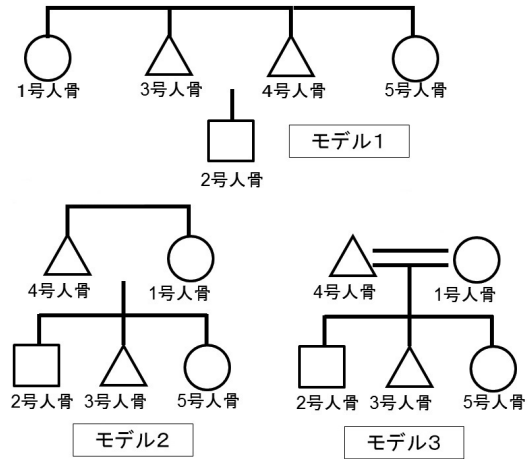


図25 立切63号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル



図26 立切64号地下式横穴墓人骨出土状態

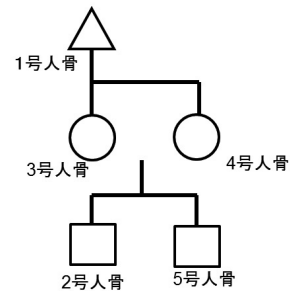


図27 立切64号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

の二通りの場合が考えられる。

一方で、2号・3号人骨間の埋葬間隔を長く見積もった場合、1号人骨(成年)、2号人骨(誕生前)、3号人骨(未成人)、4号人骨(成年)、5号人骨(成年)となり、1号・4号・5号人骨が第一世代で、2号・3号人骨が第二世代ということになる(モデル1の3号人骨が第二世代になった状態)。したがって、親族関係モデルはキョウダイといずれかの子ども(モデル1)の可能性が考えられる。

5-9. 立切64号地下式横穴墓(第26図)

5体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(老年男性)、2号人骨(10歳前後小児不明)、3号人骨(熟年女性)、4号人骨(熟年女性)、5号人骨(3歳前後幼児不明)である。1号人骨は熟年、3号人骨は成人として報告されているものの、出土写真の歯槽の低下状況からそれぞれの年齢を老年と熟年と推定した。

1号人骨は、保存状態があまり良くないが、左右の寛骨の幅がある程度保たれているため、1号人骨と2号人骨の埋葬間隔はそれほど長くないと推定される。2号人骨は左股関節が外れており、3号人骨の寛骨直下から2号人骨の前腕に装着されていたと推定される貝輪が出土している。このように、2号人骨はある程度骨化が進んだ段階で奥壁側に寄せられていることから、2号人骨と3号人骨の埋葬間隔は10年かそれ以上が見込まれる。3号人骨は、下肢の間隔が狭く左右の寛骨も若干重なった状態であり、かなり骨化が進行した段階で奥壁側に片付けられたと考えら

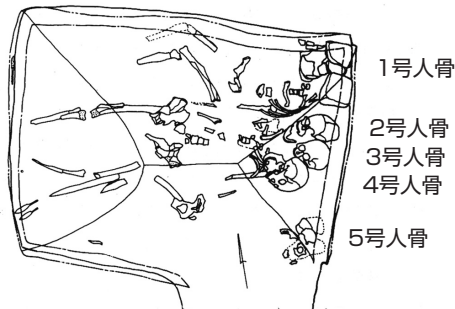


図28 立切68号地下式横穴墓人骨出土状態



図29 立切68号地下式横穴墓被葬者の親族関係モデル

れる。したがって、3号人骨と4号人骨の埋葬間隔も10年かそれ以上が見込まれよう。4号人骨は保存状態があまり良くないため、5号人骨との埋葬間隔は不明である。

以上から、生前の年齢構成は1号人骨(老年)、2号人骨(小児)、3号(成年後半～熟年前半)、4号(成年)、5号人骨(生前)となり、1号人骨が第一世代、3・4号人骨が第二世代、2号・5号人骨が第三世代となる。したがって、親族関係モデルは第27図のようになり、父と娘とその子の場合が考えられる。

5-10.立切68号地下式横穴墓(第28図)

5体が埋葬されていた。玄室奥壁側から1号人骨(成年男性)、2号人骨(7歳前後小児不明)、3号人骨(6歳前後不明)、4号人骨(成年男性)、5号人骨(不明男性)である。

1号・2号・3号人骨は、いずれも保存状態があまり良くないため、これらの埋葬間隔の推定は困難である。4号人骨はほぼ全身が関節状態を保っている。

ところで、1号人骨の左肋骨直下から出土した上腕骨は、報告では1号人骨に帰属するとされているが、片付けの際に上腕骨を奥壁側ではなく反対側の左肋骨の下に配するのは不自然である。しかも、左肩関節が外れ上腕骨を大きく動かせるほど1号人骨の骨化が進行した段階で、その左肋骨の下に上腕骨を挿入しているにもかかわらず、左肋骨が全く乱れていないのは不自然である。一方で、4号人骨の鎖骨・肩甲骨との関係でこの上腕骨をとらえると、3者はほぼ関節状態の位置関係となる。したがって、4号人骨の右上腕骨が1号人骨の左胸郭上に乗せられていたものが、1号人骨の軟部組織の腐朽にともない肋骨間に落ち込んだと考えられる。これらから、4号人骨の埋葬時には1号人骨軟部組織の腐朽はそれ程進んでいなかったと推定され、1号人骨から4号人骨までの埋葬間隔は比較的短かったと推定される。そして、4号人骨は、ほぼ全身が関節状態を保っていることから、5号人骨との埋葬間隔は比較的短いと推定される。なお、2号・3号人骨は、頭蓋のみ遺存しており、下顎には第二乳臼歯を除いて乳歯は遺存しておらず、永久歯の一部のみが遺存していることから、他所に埋葬されていた個体が改葬された際に植立していた乳歯が脱落した可能性も考えられる。

以上から、当初から68号地下式横穴墓に埋葬されていた1・4・5号人骨の生前の年齢構成は、1号人骨(成年)、4号人骨(成年)、5号人骨(成人)となり、3体は同世代ということになる。したがって、親族関係モデルは第29図のようになり、被葬者はキョウダイであったと考えられる。

6. 地下式横穴墓被葬者の親族関係

二つの地下式横穴墓群を検討してきたが、旭台地下式横穴墓群の分析結果は、血縁関係に基づく複数世代の被葬者構成であり、同世代の人物はキョウダイ関係にあると推定された。そして、世代ごとの性構成から双系の親族関係であったと推定された。そして、この結果は立切地下式横穴墓に対する予察を支持するものでもある。

立切地下式横穴墓群で多く見られたのが同世代のキョウダイもしくはキョウダイといずれかの子どもの二世代からなる親族関係モデルである(6号・30号・35号・40号・68号)。その他にキョウダイもしくは夫婦とその子ども(4号・60号)と父とその子ども(60号墓)、キョウダイもしくは父その子どもとその子ども3世代(3号墓・64号墓)といった親族関係モデルが復元可能である。

まず、キョウダイもしくはキョウダイといずれかの子どもの二世代からなる親族関係モデルについてみると、兄弟もしくは兄弟とその子ども(6号墓・30号墓・68号墓)、姉妹とその子ども(35号墓)、兄弟姉妹(40号墓)とその構成は多様であるが、共通しているのは男女を単位としていない点である。

次に、キョウダイもしくは夫婦とその子どもからなる親族関係モデル(4号墓・60号墓・63号墓)は歯冠計測値の結果により論が大きく異なる。すなわち、第一世代の男女間に血縁関係が見られる場合はキョウダイの可能性が高くなり基本モデルIの範疇に入る。また、60号墓に関してはもう1つの可能性として父とその子ども達となりやはり基本モデルIもしくは基本モデルIIと二つの可能性が出てくる。血縁関係が見られない場合は第一世代の男女は夫婦の可能性が高くなり基本モデルIII(田中1995)ということになる。

三世代(6号墓・64号墓)モデルに関しては同世代の構成が女性同士・男性同士・未成人同士もしくは男性と未成人の組み合わせが見られ、夫婦埋葬の可能性は否定される。加えて、64号墓のように成人しており婚出していた可能性の高い女性が父親の墓に埋葬されていると考えられる。このような構成は田中の基本モデルIIの派生型にもみられるが、基本モデルIの累代的発展(草場第二遺跡192号墓)としても説明可能であり一例では判断できない。

以上の立切地下式横穴墓群の分析は仮説としてのモデルを設定したのみであり、これらはいずれも歯冠計測値を用いた検証が必要なものである。しかし、旭台地下式横穴墓群の分析結果とは基本的に共通した構成であり、初葬者も男性の場合(3号・6号・30号・60号・64号・68号)もあれば、女性の場合(4号・40号・63号)もあり、父系でも母系でもない双系の社会であろうという点も共通している。したがって、南九州山間部における地下式横穴墓を営んだ社会は、双系社会で、キョウダイ関係を基本とした複数世代の埋葬を行っていたと考えられるのである。

この親族関係は田中が基本モデルIと呼んだものの派生型であるが、その後父系が始まり、5世紀後半には農民層まで父系化して基本モデルIIへと転換する(田中1995)。そして、その変化は単に親族関係が父系化するだけでなく、家族が氏族共同体から自立して経営単位となり、家族の直系化によって傍系親族の分節運動が始まって、その結果として群集墳を生み、経営単位(家族)の増大は生産力の増大をもたらし、古代国家形成のインフラを形成した(田中1995)。

その脈絡でみると、5世紀末まで営まれた立切地下式横穴墓群がなお基本モデルIの親族関係を維持し、大萩地下式横穴墓群30号墓(F-6号墓)(内藤1974; 坂田1974)のように6世紀代にも女性のみの埋葬の事例があることから、この地域における父系化は遅れた可能性が高い。そして、このような安定性もしくは停滞性は、列島の大半において父系化とともに生じた社会変化がこの地域には及ばなかったことを暗示しているのである。

7. 結語



以上、宮崎県山間部の地下式横穴墓における被葬者の親族関係を分析してきた。その結果は、旭台地下式横穴墓群においては、被葬者は血縁関係に基づいて埋葬されており、かつ同世代の人物はキョウダイであり、その関係に基づいて2世代あるいは3世代の構成を取るというものであった。また、歯冠計測が現状では不能である立切地下式横穴墓群においても、復元された親族関係モデルをみるかぎり、旭台地下式横穴墓群と大差はなく、同様にキョウダイ関係に基づく可能性が高いというものであった。また、親族関係は両遺跡とも双系の可能性が高く、それは5世紀いっぱいにとどまらず、6世紀代まで継承されるという見通しもえられた。

これらは基本モデルⅡとしたもので、キョウダイ関係に基づく双系の親族が埋葬され、その背景となる集団はいまだ家族ではない(田中1995)。そして、5世紀後半に父系化とともに直系家族が登場して経営の単位となることを考えると、列島の大半における社会変化は、この地域には生じていなかったことがうかがえる。また、その安定性もしくは停滞性は、のちに「隼人」として特異視されることの要因の一つである可能性もあろう。

南九州において同様の分析を広範に行うことができるならば、これらの可能性を検証することも可能であると考えられる。今後に期したい。

最後に、本論を行うにあたって旭台地下式横穴墓群の調査についての貴重なご教示をいただいた岩永哲夫氏、種々の便宜とご支援を賜った宮崎県埋蔵文化財センター北郷泰道氏、長津宗重氏、近藤協氏、津隈久美子氏、西都原考古博物館甲斐貴充氏、藤木聡氏、柄本優子氏に謝意を表したい。

文献

- 土肥直美・田中良之・船越公威, 1986: 歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用. 人類学雑誌, 94-2, pp147-162
 石川恒太郎・日高正晴・岩永哲夫, 1977: I. 旭台地下式古墳群発掘調査. 宮崎県文化財調査報告書, 第19集. 宮崎県教育委員会 pp1-43頁.
 北郷泰道, 1984: 大萩地下式横穴墓群. 宮崎県文化財調査報告書, 第27集. 宮崎県教育委員会.
 北郷泰道, 1986: 南境の民の墓制. えとのす, 31. 新日本教育図書, pp108-122.
 松下孝幸・分部哲秋・野田耕一, 1983: II. 旭台地下式横穴群発掘調査報告(人骨編). 宮崎県文化財調査報告, 第26集. 宮崎県教育委員会, pp75-128.
 内藤芳篤, 1974: 人骨. 大萩遺跡(1). 宮崎県教育委員会.
 西住欣一郎編, 1990: 天道ヶ尾遺跡(II). 熊本県文化財調査報告, 第111集. 熊本県教育委員会.
 面高哲郎・長津宗重他, 1991: 立切地下式横穴墓群. 高原町文化財調査報告, 第1集. 高原町教育委員会.
 坂田邦洋, 1974: 人骨の埋葬方法について. 大萩遺跡(1). 宮崎県教育委員会.
 田中良之, 1995: 古墳時代親族構造の研究. 柏書房, 東京.
 田中良之, 2008a: 骨が語る古代の家族. 吉川弘文館.
 田中良之, 2008b: 断体儀礼考. 九州と東アジアの考古学. 九州大学考古学研究室50周年記念論文集. 九州大学考古学研究室, 福岡. pp275-294
 田中良之・土肥直美・船越公威・永井昌文, 1985 「上ノ原横穴墓被葬者の親族関係」『上ノ原遺跡群』4. 大分県教育委員会, 大分. pp10-16
 田中良之・村上久和, 1994: 墓室内飲食物供献と死の認定. 九州文化史研究所紀要, 39. PP91-109